昭和46年9月1日発行（毎月1回1日発行）第20巻・第11号 昭和29年6月23日 日本国有鉄道特別扱承認雑誌第2836号 昭和30年3月24日第三種郵便物認

航空ファン

THE KOKU-FAN

ワイドカラー

WIDE COLOUR

中島1式戦闘機

隼

攻撃空母レンジャー（CVA-61）の搭載機

6月初めに横須賀に寄港した米攻撃空母レンジャー（CVA-61）の搭載機。手前にE-1Bトレーサーのレドームが見え，第21戦闘飛行隊（VF-21）のF-4JファントムII，第113攻撃飛行隊（VA-113）のA-7EコルセアII，SH-3Gシーキングなどが映っている。

〔上〕E-1Bのレドームの向うは第113攻撃飛行隊のA-7Eと第21戦闘飛行隊のF-4J。このA-7Eは蜂のマークを付けて、部隊のニックネームは"ステンガー"（針）。〔下〕第154戦闘飛行隊（VF-154）"ブラック・ナイト"部隊のF-4J。

〔下〕第1重偵察攻撃飛行隊（RVAH-1）のRA-5Cビジランテイ。この部隊は"タイガース"のニックネーム。

攻撃空母ミッドウェー(CVA-41)の搭載機

このページ以降は，レンジャーにつづいて横須賀を訪れた米攻撃空母ミッドウェーの搭載機。6月18日の撮影。

左ページ　艦橋より見たミッドウェーの中央部甲板。手前の2機は空中給油に使われている第115攻撃飛行隊（VA-115）のKA-6Dイントルーダー。同飛行隊には4機が装備されている。その左はE-2Bホークアイで，第115早期警戒飛行隊（VAW-115）の所属機。その後ろには，ローターをはずしたSH-3Gヘリ，A-7B，A-6Aなどが並んでいる。

（上）"チャージャーズ"のニックネームのついた第161戦闘飛行隊（VF-161）のF-4B。（下）第115早期警戒飛行隊"ウォリーバーズ"のE-2B

右ページ上　もう一つのファントム部隊第151戦闘飛行隊（VF-151）"ビジランティズ"のF-4B。（同下）機首にきめロのマークを付けたA-7B，第93攻撃飛行隊（VA-93）の所属機

米空軍の新鋭 A-7D戦闘機

米空軍の新鋭戦術戦闘機 A-7D コルセアIIの最初の部隊は，現在サウス・カロライナ州のマートル・ビーチ基地で編成中であるが，これまで3コ飛行隊の編成を終えている。

写真上の MR 記号の機体はその一つ，第511戦術戦闘飛行隊の所属機。写真下の LA 記号の機体は，第310戦術戦闘訓練飛行隊の所属機で，この部隊はアリゾナ州のルーク空軍基地でただいま飛行訓練中。

あなたのほしいマークはどれ？

REVELL 1/32 DECAL

復元されたキングフイッシャー

29年前の1942年に，カナダのブリテイシュ・コロンビア州沖のカルバート島に墜落したまま20年近くも放置されていたOS2Uキングフイッシャーが，ごらんのように見事に復元された。

同機は1963年にカナダ航空博物館用に回収されたが，2年前に米海軍が譲り受けて，復元のために製造元のボート社の後身，LTV社に運び込んで作業を進めていたもの。復元に当ったのは，LTVの"エアロスペース・ウォーター・センチュリー・クラブ"出身の12人の会員たち。復元を終えたOS2Uは，去る5月15，16日の両日，ダラス海軍航空基地の開隊記念日に同基地に展示され，一般に公開された。写真は公開されたOS2U。下はA-7EコルセアIIと並んだところ。

① PLANE FIGURE OF ②AIRCRAFT
② TSUKUBA AIR CORPS
③ 653RD AIR CORPS,COMMANDER'S A/C OF AIRCRAFT CARRIER "ZUIKAKU" SQDN.
④ 721ST "JINRAI" AIR CORPS

① 図②の平面全姿
② 筑波航空隊所属機
③ 第653航空隊・瑞鶴指揮官機
④ 第721航空隊（神雷）所属機

①

②

ツ-43

③

1
653-117

④

神-122

© K. Hashimoto

三菱A6M5 零式艦上戦闘機52型

MITSUBISHI A6M5 REISEN

第２次大戦中の日本機を代表するとまでいえるほど，特に戦後有名になったのが零戦で，大戦の中～後期の生産型である52型は最も ポピュラーな型として知られている。

☆キット紹介☆

プラ・プレーンとしても最もポピュラーなもののひとつである零戦のキットは，レベルから２種が発売中で，1/72スケールのキットと最近発売された「雷電」などと同じスケールの1/32シリーズがあって，どちらも52型であるが，1/32はコクピット内部からエンジンに至る内部構造が実に精巧に作られている超デラックス版，キャノピがスライド開閉し，機体表面の彫刻仕上げもバツグンの精巧さであり，大型カラー図と日本語説明および塗装・改造の図解つきである。

いっぽう1/72キットのほうも，ミニ版ながら零戦の特徴をうまく表現した楽しいキットで，エンジンを内蔵するなどと細部も入念に仕上げられている。

☆塗装について☆

零戦52型の基本塗装は機体の上・側面を日本海軍ダークグリーン[15]，下面は明灰白色[35]の塗装で，主翼前縁にオレンジ・イエローの味方識別塗装の帯があり，プロペラブレードとスピナは暗赤褐色（レッドブラウン[41]を代用），機体内部はブルーグリーン（シルバー[8]の下塗りの上へクリヤーイエロー[48]＋クリヤーブルー[50]を混色したブルーグリーンを塗る）。なお機体内部色は青味の強いものと黄の勝ったグリーンの２種があったから好みによって混色を変えればよい。

図①と②は筑波航空隊の所属機で，機体の上面は日本海軍のダークグリーン[15]，下面はシルバー[8]，カウリングは黒の半つや消し[33]にごく少量のブルー[5]を混色で塗ると実感が出る。

図③と④も上・側面がダークグリーン[15]，下面は明灰白色[35]の塗装，スピナは白[1]＋[30]，排気管は黒鉄色[28]に少量のブラウン[7]などを混色して焼鉄色にすれば感じが出せる。

（K.Hashimoto）

The Zero fighter was Japan's representative aircraft during WWII. This aircraft has especially been limelighted after the war.

Among other Zero fighters, the Model-52, the mass-production type in the middle and latter stages of the war, is the most popular.

KIT:

The Zero fighter is one of the most sought-after plastic model planes. The Model-52 Zero fighter kit is now on sale from Revell in both the 1/72 and 1/32 series. The 1/32 series kit is the same scale as that of the "RAIDEN" which was recently placed on the market. The 1/32 series kit is the so-called "deluxe edition-perfect in every detail from the inside of the cockpit to the engine.

The canopy opens and closes, and the engravings on the fuselage surface are delicately made. A large color picture with explanations in Japanese and explanatory diagrams for painting and remodeling are included with the 1/32 kit.

The 1/72 kit, though smaller, is by no means inferior to the 1/32 kit in expression of the Zero's outlines. Elaborate in every detail, it is an excellent kit.

PAINTING:

For the standard painting of the Model-52 Zero fighter, the top and sides of the plane are Revell Color (RC) 15, Japanese Navy dark green. The bottom surface of the fuselage is RC-35, light gray. On the front edges of the wings are orange-yellow stripes indicating that this is a friendly plane. The propeller blades and spinner are dark brown (RC-41, red brown can be used). The interior of the plane is blue green (which can be made by placing a mixture of RC-48, clear yellow and RC-50, clear blue, over an RC-8, silver, base). There were two different tones: one bluish-green and the other yellowish-green; therefore you can make the interior color by varying the mixture ratio.

Figs. 1 and 2. The plane in these figures belonged to the Japanese "Tsukuba" Air Corps. The upper surfaces of the planes are RC-15, Japanese Navy dark green. The lower surface is RC-8, silver. You can get a realistic effect if you paint the cowling with RC-33, half-frosted black and a little RC-5, blue.

Figs. 3 and 4. The top and sides are RC-15, dark green. The low surfaces are RC-35, light gray. The spinner is RC-1 and 30, white. A mixture of RC-28, black-iron, and a little RC-7, brown, is very effective for the exhaust tubes.

(K. Hashimoto)

零戦52型データ（A6M5 technical data）

全幅（span）11.00m，全長（length）9.121m，全高（height）3.509m，翼面積（wing area）21.30㎡，全備重量（gross weight）2.733kg，発動機（power plant）栄21型（Sakae21・1.130HP）×１，最大速度（max. speed）565km/hr，武装（armament）7.7mm×２，20mm×2，爆弾（bomb）30～60kg×2，乗員（crew）1。

零戦の塗装に必要なレベル・カラー

①ホワイト	②ブラック
③レッド	④イエロー
⑤ブルー	⑦ブラウン
⑧シルバー	⑮濃緑色
㉟明灰白色	㉘黒鉄色
㉝ブラック	㊶レッドブラウン
㊽クリヤーイエロー	㊿クリヤーブルー

三菱A6M5 零式艦上戦闘機52型

MITSUBISHI A6M5 REISEN

第2次大戦中の日本機を代表するとまでいえるほど，特に戦後有名になったのが零戦で，大戦の中－後期の生産型である52型は最もポピュラーな型として知られている。

☆キット紹介☆

プラ・プレーンとしても最もポピュラーなもののひとつである零戦のキットは，レベルから2種が発売中で，1/72スケールのキットと最近発売された「雷電」などと同じスケールの1/32シリーズがあって，どちらも52型であるが，1/32はコクピット内部からエンジンに至る内部構造が実に精巧に作られている超デラックス版，キャノピがスライド開閉し，機体表面の彫刻仕上げもバツグンの精巧さであり，大型カラー図と日本語説明および塗装・改造の図解つきである。

いっぽう1/72キットのほうも，ミニ版ながら零戦の特徴をうまく表現した楽しいキットで，エンジンを内蔵するなどと細部も入念に仕上げられている。

☆塗装について☆

零戦52型の基本塗装は機体の上・側面を日本海軍ダークグリーン[15]，下面は明灰白色[35]の塗装で，主翼前縁にオレンジ・イエローの味方識別塗装の帯があり，プロペラブレードとスピナは暗赤褐色（レッドブラウン[41]を代用），機体内部はブルーグリーン（シルバー[8]の下塗りの上へクリヤーイエロー[48]＋クリヤーブルー[50]を混色したブルーグリーンを塗る）。なお機体内部色は青味の強いものと黄の勝ったグリーンの2種があったから好みによって混色を変えればよい。

図①と②は筑波航空隊の所属機で，機体の上面は日本海軍のダークグリーン[15]，下面はシルバー[8]，カウリングは黒の半つや消し[33]にごく少量のブルー[5]を混色で塗ると実感が出る。

図③と④も上・側面がダークグリーン[15]，下面は明灰白色[35]の塗装，スピナは白[1]＋[30]，排気管は黒鉄色[28]に少量のブラウン[7]などを混色して焼鉄色にすれば感じが出せる。

（K.Hashimoto）

The Zero fighter was Japan's representative aircraft during WWII. This aircraft has especially been limelighted after the war.

Among other Zero fighters, the Model-52, the mass-production type in the middle and latter stages of the war, is the most popular.

KIT :

The Zero fighter is one of the most sought-after plastic model planes. The Model-52 Zero fighter kit is now on sale from Revell in both the 1/72 and 1/32 series. The 1/32 series kit is the same scale as that of the "RAIDEN" which was recently placed on the market. The 1/32 series kit is the so-called "deluxe edition-perfect in every detail from the inside of the cockpit to the engine.

The canopy opens and closes, and the engravings on the fuselage surface are delicately made. A large color picture with explanations in Japanese and explanatory diagrams for painting and remodeling are included with the 1/32 kit.

The 1/72 kit, though smaller, is by no means inferior to the 1/32 kit in expression of the Zero's outlines. Elaborate in every detail, it is an excellent kit.

PAINTING :

For the standard painting of the Model-52 Zero fighter, the top and sides of the plane are Revell Color (RC) 15, Japanese Navy dark green. The bottom surface of the fuselage is RC-35, light gray. On the front edges of the wings are orange-yellow stripes indicating that this is a friendly plane. The propeller blades and spinner are dark brown (RC-41, red brown can be used). The interior of the plane is blue green (which can be made by placing a mixture of RC-48, clear yellow and RC-50, clear blue, over an RC-8, silver, base). There were two different tones; one bluish-green and the other yellowish-green; therefore you can make the interior color by varying the mixture ratio.

Figs. 1 and 2. The plane in these figures belonged to the Japanese "Tsukuba" Air Corps. The upper surfaces of the planes are RC-15, Japanese Navy dark green. The lower surface is RC-8, silver. You can get a realistic effect if you paint the cowling with RC-33, half-frosted black and a little RC-5, blue.

Figs. 3 and 4. The top and sides are RC-15, dark green. The low surfaces are RC-35, light gray. The spinner is RC-1 and 30, white. A mixture of RC-28, black-iron, and a little RC-7, brown, is very effective for the exhaust tubes.

(K. Hashimoto)

零戦52型データ（A6M5 technical data）

全幅（span）11.00m，全長（length）9.121m，全高（height）3.509m，翼面積（wing area）21.30㎡，全備重量（gross weight）2,733kg，発動機（power plant）栄21型（Sakae21・1,130HP）×1，最大速度（max. speed）565km/hr，武装（armament）7.7mm×2，20mm×2，爆弾（bomb）30～60kg×2，乗員（crew）1。

零戦の塗装に必要なレベル・カラー	
①ホワイト	②ブラック
③レッド	④イエロー
⑤ブルー	⑦ブラウン
⑧シルバー	⑮濃緑色
㉟明灰白色	㉘黒鉄色
㉝ブラック	㊶レッドブラウン
㊽クリヤーイエロー	㊿クリヤーブルー

零式艦上戦闘機21型　築波航空隊所属の1機で，離陸に向うところ。塗装は当時の海軍機の標準であった機体上・側面が暗緑色（海軍機色），下面が明灰白色の迷彩。尾翼の「ツ」は築波航空隊を現わす略記号。

零式艦上戦闘機52型

グァム島で回収，日本で復元されて航空自衛隊浜松基地に保管されている零戦52型。すでに皆様よくご存知の機体である。復元機とはいえ，外形は現役当時そのままの流麗な線。歴戦零戦の面影を充分にしのぶことができる。

BOEING *PEASHOOTER P-26A*

① 第1追撃大隊第94追撃中隊機。
94TH PURSUIT SQDN.,
1ST PURSUIT GR.

② 第17攻撃大隊第95攻撃中隊機。
95TH ATTACK SQDN./17TH ATTACK GR

③ 第20追撃大隊指令官機。
GROUP COMMANDER'S A/C OF 20TH PURSUIT GR

④ ボーリング・フイールド派遣隊。
BOLLING FIELD DETACHMENT

© K. Hashimoto

ボーイング P-26A ピーシュータ

BOEING P-26A PEASHOOTER

1930年代の最新鋭機としてアメリカ陸軍が採用した初の実用低翼単葉戦闘機で，当時の航空界に話題をまき，平和時代の戦闘機として派手な塗装で，さかんにデモストレーションをして注目された。

☆キット紹介☆

P-26A唯一のキットとしてレベルから1/72スケールのキットが発売中で，全幅11.8cm，全長10.1cmというミニ・ミニ・プレーンではあるが，細部の表現も精巧で実感を出している。組立ては特に手を入れなければ10分もあればOK，満艦色ともいえる派手な塗装のほうへエネルギーを集中して仕上げると魅力的なピーシューターの中隊が，あなたのものとなる。

なお主翼と脚柱間の張り線は細い糸を使用して必らずセットするのが，実感を出すコツ。古き良き時代のグーなフライング・マシンである。

☆塗装について☆

図① 機体はダークグリーン（オリーブドラブ38＋グリーン6）の半つや消し，主翼の上下面と垂直尾翼，水平尾翼上下面がクロームイエロー（イエロー4＋レッド3少量）の塗装，プロペラ・ブレードはシルバー8で，胴体のストライプは赤にクロームイエローのふちつき。

中隊マークのインデアンマークは本誌71年8月号19頁のカラー図にあるP-36Aのものと同じ。主翼の下面は右翼にU.S.左翼にARMYの黒文字があり，水平尾翼の前縁は黒のつや消しとなっている。

図② 機体がブルー（スカイブルー34＋ブルー5）の塗装で，胴体の下面に白で62の番号が記入されており，主翼は図①と同じクロームイエロー。水平尾翼は，垂直尾翼と同じようにブルーで前縁にクロームイエローの波形の塗装がなされている。中隊マークはクロームイエローの丸の中にダークアースのロバ（黒ふちつき）があり，地色は胴体と同色。

図③と図④は図①と同じダークグリーンとクロームイエローの塗装で，図③は胴体にクロームイエローのストライプつき，カウリングは赤，クロームイエロー，ブルー（胴体より濃い色）の塗り分け。図④はカウリングがクロームイエローとブルー（スカイブルー34＋ブルー5少量）の塗り分け，胴体のマークは中央部はカウリングのブルーと同色，周囲は濃いブルーとクロームイエローの塗り分けとなっている。

（K.Hashimoto）

P-26Aデータ（P-26A technical data）

全幅（span）8.5m，全長（length）7.2m，全高（height）3.19m，全備重量（gross weight）1,378kg，発動機（power plant）P&W R-1340-27（500HP）×1，最大速度（max. speed）376km/hr，武装（armament）7.7mm×2，乗員（crew）1。

This is the low-winged, monoplane fighter the U.S. Army accepted for the first time in the 1930's. The plane made its debut as the most up-to-date fighter in the peace years and was the topic of talk in aviation circles in those days, due to its colorful painting and skillful demonstrations.

KIT:

The P-26A kit is now on sale from Revell in its 1/72 series. This is the only P-26A kit in the Revell kit series. Though it is very small in size-only 11.8 cm in width by 10.1 cm in length-its design is so elaborate that model kit fans can't help but enjoy it. No great skill is required to assemble it. You can put the plane together in ten minutes to obtain a fascinating, dressed-up Peashooter squadron. Be sure to use a fine thread for the lines between the wings and wheel strut. This is the secret to make this "good old days'" flying machine all the more realistic.

PAINTING:

Fig. 1. The fuselage is half-frosted dark green (Revell Color 38, olive drub and RC-6, frosted green). Both sides of the wings, vertical stabilizer and elevators are chrome yellow (RC-4, yellow, and a little RC-3, red). The propeller blades are RC-8, silver, while the stripes on the fuselage are red bordered with chrome yellow.

The squadron insignia, an Indian mark, is similar to that of the P-36A appearing on Page 19 (color page) of the August 1971 issue of our magazine.

On the lower surface of the right wing are the letters, "U.S." and on the left "ARMY" in black. The leading edges of the elevators are frosted black.

Fig. 2. The fuselage is blue (RC-34, sky blue and RC-5, blue). On the bottom of the fuselage are the letters, "62" in white. The wings are chrome yellow similar to Fig. 1. The elevators and stabilizers are blue and the leading edges of elevators are painted in wave-shaped chrome yellow. The squadron insignia is a dark earth donkey (bordered in black) in a chrome yellow circle.

Figs. 3 and 4. Like that of Fig. 1, the planes in Figs. 3 and 4 are painted in dark green and chrome yellow. The one in Fig. 3 has chrome yellow stripes on the fuselage. The cowling is three colors-red, chrome yellow and blue (darker than that of the fuselage). The cowling of Fig. 4 is chrome yellow and blue (RC-34, sky blue plus a little RC-5, blue). The central part of the insignia on the fuselage is blue similar to that of the cowling. The insignia's outer edge is dark blue and chrome yellow.

(K. Hashimoto)

P-26Aの塗装に必要なレベル・カラー

①ホワイト	③レッド
④イエロー	⑤ブルー
⑧シルバー	㉘黒鉄色
㉝ブラック	㉞スカイブルー
㊳オリーブドラブ	⑥グリーン

ボーイングP-26Aピーシューター戦闘機　この機体はライトパタソンの米空軍博物館が保管している1機で，かつてミシガン州のセルフリッジ・フィールドを基地としていた有名な第94追撃中隊の所属機であったもの。現在は写真のように，1930年中頃の第34攻撃中隊の塗装で展示されている。

ボーイングP-26A

●横須賀に寄港した二つの攻撃空母●

〈その1〉

CVA-61 レンジャー

先月号の"タイコンデロガ"にひきつづき、今回も横須賀に寄港した2隻の米空母の搭載機をご紹介することにしよう。

まず6月初めに来日した攻撃空母"レンジャー"（CVA-61、フォレスタル級、59,650トン）から。

"レンジャー"に配属されている航空部隊は第2空母攻撃航空団（CVW-2）の各飛行隊で、戦闘機部隊はF-4Jを装備した第21と第154戦闘飛行隊（VF-21、VF-154）、攻撃機部隊はA-7E装備の第25と第113攻撃飛行隊、A-6A／B／C装備の第145攻撃飛行隊（VA-145）、そのほかKA／EKA-3Bを装備した第134艦載電子飛行隊(VAQ-134)、RA-5Cの第1重偵察攻撃飛行隊（RVAH-1）、それにE-1Bの派遣隊第111早期警戒飛行隊（VAW-111）、SH-3Gヘリの第1戦闘支援ヘリコプタ飛行隊（HC-1）などである。

（前ページ）"レンジャー"の艦橋から見た中央部甲板。尾翼に蜂のマークを画いた第113攻撃飛行隊のA-7EコルセアIIなどが並んでいる。

（上）第111早期警戒飛行隊のE-1Bトレーサー。（左・下）第1重偵察攻撃飛行隊のRA-5Cビジランテイ。左の写真で翼下のカメラ・ポッドがよくわかる。

〔上2枚〕第154戦闘飛行隊のF-4JファントムII。下の写真の機体は第2空母攻撃航空団の司令官機である。

〔右・下〕第145攻撃飛行隊のA-6イントルーダー。写真右の機体はA型，下はC型である。

CVA-41 ミッドウェー

"レンジャー"につづいて6月中旬に来日した攻撃空母"ミッドウェー"(CVA-41、51,000トン)には、第5空母攻撃航空団(CVW-5)の各飛行隊が配属されている。

F-4Bの戦闘機隊は第151と第161両飛行隊(VF-151、VF-161)、攻撃機はA-7Bの第56と第93攻撃飛行隊(VA-56、VA-93)とA-6Aの第115攻撃飛行隊(VA-115)で、このVA-115には空中給油母機に使っているKA-6Dも4機装備している。そのほかE-2B装備の第115早期警戒飛行隊(VAW-115)、それにEKA-3Bの第130電子飛行隊(VAQ-130)とSH-3Gの第1戦闘支援ヘリコプタ飛行隊(HC-1)の両派遣隊である。

〔上・左〕第161戦闘飛行隊のF-4BファントムII。この部隊のニックネームはチャージャース(突撃者)。

〔下〕第151戦闘飛行隊のF-4B。ニックネームはビジランテイス(自警団)。

〔上〕第56攻撃飛行隊のA-7BコルセアII。A-7Bは，カラーページにあるようにサメの口を描いた第93飛行隊機も搭載されている。最近の米空母航空隊機のマークと塗装は，なかなか多彩である。

〔上2枚・下〕空中給油機として使われている第115攻撃飛行隊のKA-6Dイントルーダー。上の右の写真の胴体下に見えるのが給油装置。この機体は21,000ポンド（9,000kg）の燃料を積むことができる。

〔上〕第115艦載早期警戒飛行隊のE-2Bホークアイ。機首側面にカラーページにあるようなマークを付けており、部隊のニックネームはライリー・ハリーズ。

〔下〕"レンジャー"の派遣隊の一つ第63軽偵察飛行隊（VFP-63）のRF-8G。文字どおり"艦隊の眼"の任務を負っている。

〔左〕この取材の当日 月10日）、"レンジャー"のハンガー内では第7艦隊司令官の交代式が行なわれた。M.F.ウイズナー中将に代って新しく就任したのは、W.P.マック中将。

(本文記事参照)

ハリアー

地道な成長をつづける

イギリス空軍の実用部隊に配属されてから満2年たつV／STOL戦闘攻撃機ハリアーは、部隊訓練の結果も好評で、アメリカ海兵隊の主力攻撃機に採用されるなど、最近は各国の空軍からも注目されている。

このページ2枚は、空母アーク・ロイヤル号上で離着艦訓練中のハリアーGR.1。最初のハリアー部隊、第38連隊（グループ）の第1飛行隊（スコードロン）の所属機である。

〔上・下〕同じく訓練中の第1飛行隊のハリアーGR.1。第1飛行隊はウイッテリング基地でハリアーを装備、西ドイツやノルウェーなどにも遠征して戦闘訓練を行なっているほか、空母イーグルやアーク・ロイヤルでの離着艦訓練を終えている。

ハリアーは、これまでにアルゼンチンやイタリア、アメリカの巡洋艦や支援空母でも離着艦のデモ飛行をしており、イギリスの陸、海、空のほかアメリカ、西ドイツなど試乗したパイロットは70空軍にのぼり、いずれもその性能を高く評価しているという。

〔左〕主翼下に総重量8,000㍀の爆弾を吊して飛行中のハリアーMk.50。この機体はアメリカ海兵隊に引渡された最初の1機である。

（左2枚）機体中央にタンデムに装備された2基のJR 100リフト・エンジン。下の写真は機体下面のその排気ノズル。2基のエンジンの後方には、自動安定装置なども積まれている。（上・下）FTBの操縦席。下の写真でパイロットがにぎっているのは操縦桿（右手）と高度制御用操縦桿（左手）。

フォート ニュース

（上）フランス海軍のF-8E（FN）クルーセイダー。同海軍では空母クレメンソーなどの艦上戦闘機として2個飛行隊分、42機を購入して、6年前から就役させている。（下）地中海のシシリー島周辺の上空で編隊飛行中のA-7BコルセアIIとRF-8Gクルーセイダー，3機とも空母ルーズベルトに配属されている機体で、A-7Bは第215攻撃飛行隊（VA-215）と第15攻撃飛行隊（VA-15)，RF-8Gは第63軽偵察飛行隊（VFP-63）の所属機である。

（上）オーストラリア海軍で2機装備しているHS.748。HS.748はこれまで250機以上が売れており、イギリスのターボ・プロップ双発機のベストセラー。（下）アメリカのO-1観測機をターボプロップ化したSM.1019A・STOL機。317HPのアリソン250-B15Gを機首に付け、イタリー陸軍の仕様に合わせてあり、観測や連絡に重用できるのが特徴。

（下）S.210という単発機を双発化したSIAIマルケッテイS.210。熱帯や高地で軽輸送に適するように考えられた6人乗り機。軍用としては、連絡のほか、航法の練習にも使える。

（上）パスカレ博士の設計した軽飛行機を地味に売りつづけていたイタリアのパルテナビア社が、1969年暮に完成した最新作このP.68。高翼で固定脚、レシプロ・エンジンを付けた双発といえば、いかにもありきたりだが、本機はもちろん全金属製だし主翼に支柱はなく、機首は風防まで段なしの美しい線。コミューターのほか、練習機にも使えるという。

（上）2～3座席の全金属製軽飛行機パルテナビアP.66Bオスカー。姉妹機にP.64Bという4座席機があり、本機はそれを簡化したもので、1967年4月から生産が行なわれ、すでに100機以上が生産されている。日本の日大N.62と非常によく似た感じ。セナ172と同級機でもある。（下）エールフランスが1946年6月25日にパリ～ニューヨーク線を開設してから今年は25年目。写真はの記念に、オルリ空港の同社ターミナルに並んでカメラにおさまった初期のD.C-4と今日使用しているボーイング747。

（上）セスナ社の新鋭ターボファン・ビジネス・ジェット機サイテーションの量産1号機が、このほどウイチタ市営飛行場で初飛行した。1号機0001（N502CC）は、8月末までにFAAのパート25の証明を取得して、その後各地をまわってデモ飛行を行なう予定である。なお、現在12機のサイテーションが最終組立てラインに入っているという。

（右上）ボーイングとアエリタリア社が共同開発することになったSTOL機の完成予想図。これは現在検討中の設計のうちの一つで、主翼に高揚力装置をそなえ、約2,000フイート（610m）の滑走路があれば充分という本格的なSTOL機。

（右下）オーストラリアの諮問委員会ではこのほど、ホバー・クラフトは自動車、船舶、航空機とは違った新しいカテゴリーの乗り物であるとの決定をくだした。オーストラリアでは現在3社がホバー・クラフトの製造に乗り出しており、近々に実用化の声もきかれるが、写真はその一つで、キャンベラの湖でデモ飛行中。

スナップ だより

〔上〕6月初め厚木基地に飛来した第212海兵隊戦闘飛行隊のF-4Jファントム II。手前の機体はその隊長機である。ごらんのように非常に変ったマークと塗装の機体で、そのすじのファンを喜ばせるに充分（平塚市・栗光雅夫）。

〔右上〕最近横田基地にときどき姿を見せるC-130E。垂直尾翼のテイルレターが消されていることに注意（国分寺市・井上則雄）。

〔右下〕このほど横田基地に飛来したカナダ国防軍のCP-107アーガス。垂直尾翼に翼の生えたトライデント（三叉のやり）が画いてある（国立市・渡辺不二男）。

〔下〕TMA航空がブラニフ航空からリースしたボーイング707-327C。5月初めに東京国際空港に飛来したときのスナップ。胴体の文字の図案が面白い（横浜市・笹野強一）。

CAPTURED Ki-43 I "HAYABUSA" RECONSTRUCTED BY NATIONALIST CHINESE.

中国で捕えられた“隼”

〔上〕尾翼の"P"は中華民国空軍の追撃機（Pursuit）の略。ラダーのマークはまだ描かれていない。

ビルマで鹵獲され、中国空軍の手にわたった1式戦"隼"I型。1942年（昭和17年）5月1日に、ビルマのヘホ基地で捕えられたものというから、ビルマ戡定（かんてい）作戦に投入された第64戦隊の1機と思われる。規律の厳しかった同部隊のことゆえ、もしその1機とすれば、作戦途中、被弾か燃料切れのため心ならずも不時着、パイロットはおそらく戦死か自決したものであろう。

鹵獲されたときにどの程度の傷みぐあいであったかはっきりしないが、中国空軍ではごらんのように立派に修復、中華民国空軍機の塗装にして飛行テストも行なっている。そのテストの写真はこれまでもそちこちで発表されているが、このように細部を撮し

たものは、数が少ない"隼"I型の写真として、貴重である。

同機は、胴体に7.7mm機銃と12.7mm機関砲を装備したI型乙と思われるが、性能テストなどを行なったのちの行方は不明である。左ページ左段2枚目の①と下の写真の①は、プロペラ滑油注入口と主脚引込指示棒を示す。ここの写真では主翼両端とエルロンがはずされている。

中国空軍では，いろんな角度から細部を撮影して"隼"を分析しているが，写真上は前方から見た機体前部，翼端とエルロンはないが，機体の傷みはほとんど感じられない。下の2枚はいっぱいに展張したファウラー・フラップ。

（上・下）翼端を欠いて変ったかたちであるが，同主翼のクローズ・アップ。翼下に"青天白日"のマークがあざやかに描かれている。

未発表海軍機写真集

N1K-1-J "SHIDEN" INTERCEPTER FIGHTER.

A 6M2 ZERO FIGHTERS AT RABAUL.

〔59ページ〕局地戦闘機"紫電"。主翼下に20ミリ機関砲を吊下げ式に装備した初期の11型。"紫電"の飛行中の写真は非常に珍らしい。〔上〕全盛の頃の零戦の勇姿。昭和17年夏頃、ラバウル基地の列線にて。第1航空戦隊の所属機である。右から2機目は21型、ほかは22型のようである。〔下〕水上戦闘機"強風"。8月号の本欄で紹介したものと同じく、終戦まもない1945年9月、佐世保基地のハンガーで撮影したもの。右手に見えるのは2式練習飛行艇の尾翼。

N1K1 "KYOFU" FIGHTER SEAPLANE.

A13A1a TYPE ZERO RECONNAISSANCE SEAPLANE.

〔上〕日華事変の終り頃から太平洋戦争の全期間にわたって使われた零式水上偵察機。写真の機体は、フロートの支柱を8本にした11甲型で、終戦後進駐してきた米軍に接収された1機。1945年9月23日、大村基地のハンガーにて。〔下〕複葉3発の90式2号飛行艇。昭和7年に川西が製作した国産初の大型飛行艇で、5機が造られている。写真の機体はその原型である。

H3K2 TYPE 90-2 FLYING-BOAT.

スピットファイアの戦闘記録

（本文記事参照）

イギリス本土を守りぬいたRAFのエース"スピットファイア"。その勇姿をバリエーションごとに紹介していくことにしよう。本文記事とあわせてごらんください。今回はその1型、F.MK.Ｉ。

スピットファイアのF.MK.Ｉの最初の機体がRAF（イギリス空軍）に引渡されたのは1938年8月、装備部隊はダックスフォードの第19中隊であった。その後各部隊につぎつぎに引渡されて、翌39年9月、大戦の火ぶたが切られる頃には、第19中隊以下8個中隊がスピットへの機種改編を終えていた。

初期のF.MK.Ｉは木製2翅の固定ピッチ・プロペラを付けていたが、量産78機目から金属製の3翅可変ピッチのものに変り、標準武装は主翼に7.7mm機銃8挺であった。

〔前ページ〕楔形編隊で飛行中のF.MK.Ｉ。スピットを最初に装備した第19中隊の所属機である。

〔上・左〕これも第19中隊のF.MK.Ｉ。左の写真ではV字形の見事な編隊を組んでいる。〔下〕3翅プロペラになったF.MK.Ｉa。第92中隊の所属機で、つぎつぎに離陸するところのシーン。後方に見える2機は、編隊離陸にスタートしている。

〔右ページ上〕これも6機の楔形編隊で飛行中の第19中隊のF.MK.Ｉ。〔同下〕同じく第19中隊のF.MK.Ｉa。主翼の7.7mm機銃の弾帯を装備中。1940年9月頃のスナップである。

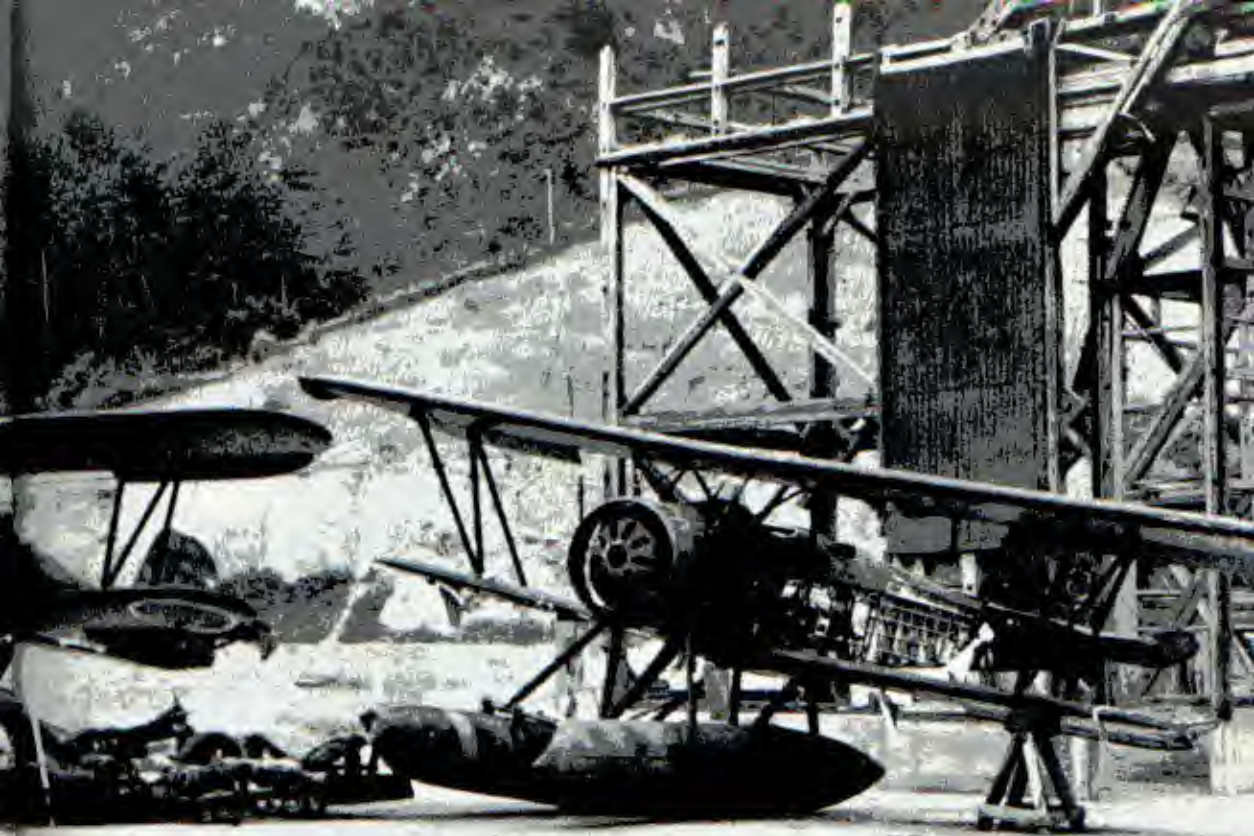
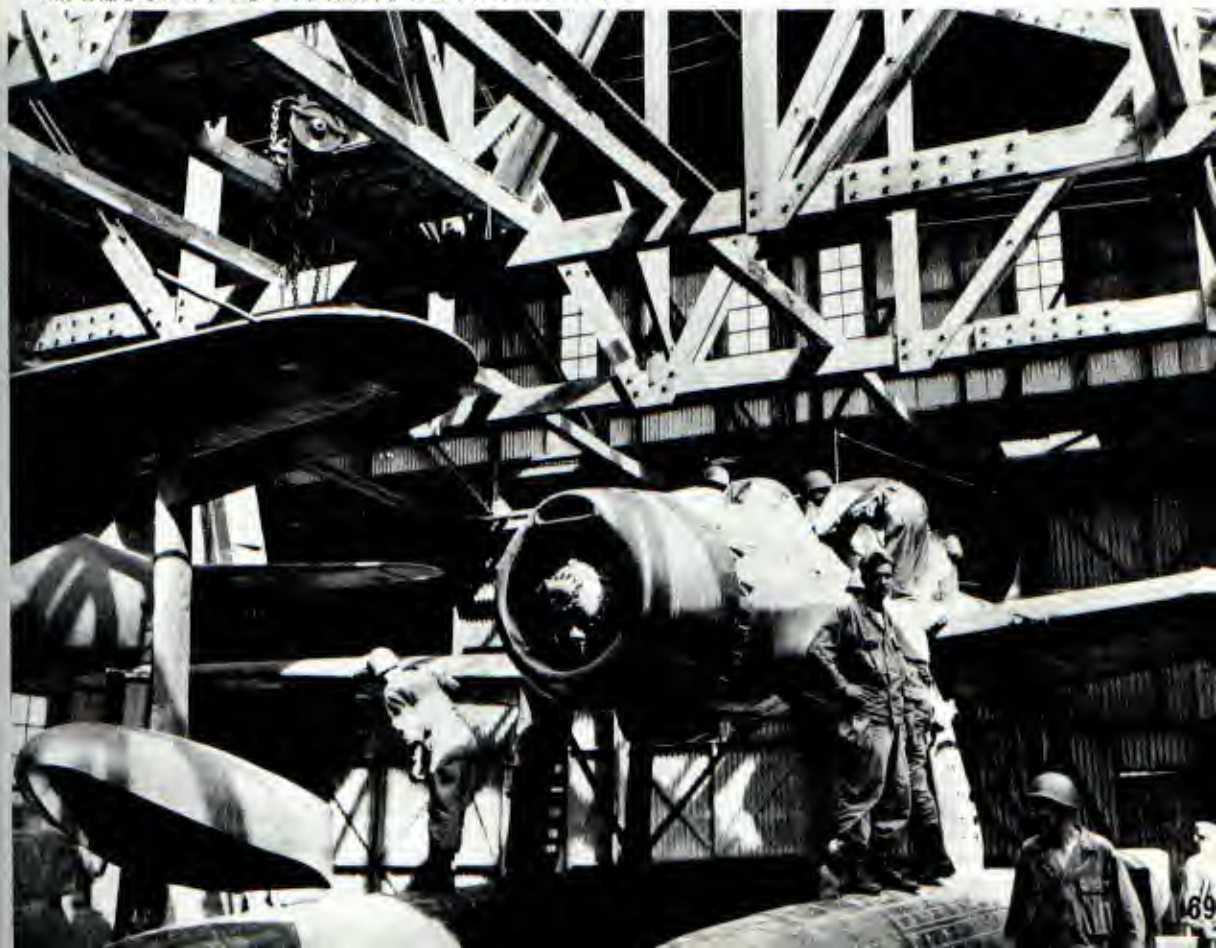
19

〔上・下〕これも第19中隊のスピットF.M.K.Ⅰa。下の写真は左旋回に入るところ。第19中隊はガントレットに代えて、最初にスピットを装備した部隊であるが、当初は63ページや前ページの写真のように、尾翼に大きく"19"の文字を画き、その文字の色で小隊を区別していた。

鹵獲された日本の軍用機《その15》

水上機の訓練基地であった香川県の詫間（たくま）基地で捕われた97式飛行艇11型（H6K2）、11型の初期の型である。この基地では数多くの超大艇が捕獲されたが、すべて壊されてしまったという。1945年11月[illegible]日の撮影。

CAPTURED JAPANESE MILITARY AIRCRAFT DURING WWⅡ

〔上〕前ページと同じく詫間基地の片隅に集められた93式水上中間練習機（K5Y2）。93式陸上中間練習機を水上型にした同機は、陸上機に劣らず身軽で、使いやすい練習機であった。昭和9年から終戦まで生産がつづけられ、数多くの水上機パイロットを育てている。写真の機体は、すべて焼却されてしまったものと思われる。1945年11月26日の撮影。

〔左ページ下〕完全な状態で接収された零式水上観測機（F1M2）。基地名は不明であるが，九州の水上基地にて1945年10月14日の撮影。〔下〕佐世保基地ハンガー内の水上偵察機“瑞雲”（E16A1）。進駐した米第32歩兵師団の隊員たちが，機体各部をものめずらしそうに点検中。1945年10月18日の撮影。

〔上・下〕ガソリンをかけられ、黒煙をあげて燃える局戦“紫電”と“紫電改”。上の写真で左側から2機が“紫電改”、3機目は“紫電”。下の写真では、端の方に1式陸攻も並べられている。火の手ののびるのを黙して待っている姿は哀れである。最後を見守るかのような緑十字の零式輸送機の“白装束”が印象的である。基地名は不明だが、1945年10月31日、空中からの撮影。

エアラインの翼

カンタス航空 ①

1920年に創設されたオーストラリアのカンタス航空（The Queensland and Northern Territory Aerial Service Ltd）は、今年がちょうど51年目。これは1次大戦の払い下げ機からジャボ機までの歩みである。

①創立4年後、1924年頃のカンタスの装備機。左からBE. 2E、ブリストル、DH. 9C、DH. 50の各機。ロングリーチ飛行場にて。

②ロングリーチのダック・ストリートに建てられたカンタスの最初の事務所。木造平屋で、看板だけがやたらに大きい。

③1次大戦の払い下げ機であるアブロ504k。100馬力の水冷直列6気筒エンジンを積んで、二人のお客さんを乗せることができた。郵便の定期便としても活躍した。カンタスはこのアブロ504kとBE. 2Eの払い下げ機2機でスタートした。

④90馬力のRAFエンジンを積んだBE. 2E。時速60マイル（96km）で、乗客一人を吹きさらしの客席に乗せて飛んだ。

(PHOTO: VIA J.D.HATHAWAY)

27年前の1944年１月12日、訓練飛行中にエンジンが故障、カリフォルニア州のサンディエゴ沖約12マイルの海上に不時着水したＦ６Ｆ-3ヘルキャットが、米海軍の手で引揚げられ、博物館用に復元されることになった。

これはその"回収作戦"の模様を伝えるスナップである。

3,400フイートの海底に沈んだまま忘れさられよう としていたこのＦ６Ｆ-3を発見したのは、ロッキードの海底探検潜航艇"デープ・クエスト"号。昨年9月17日のことであった。

まもなく"回収作戦"が遂行され、海軍の浮きドックＡＲＤ-20"ホワイト・サンズ"がエンジン・マウントに索をかんで引揚げたが、昨年10月９日。海軍ではただちにサンディエゴのノースアイランド航空基地に運んで、機体各部を点検している。

〔左ページ下２枚と上〕Ｆ６Ｆ-３に引揚げ用の索をかける。昨年10月９日、浮きドックＡＲＤ-20から飛び込んだ海軍の潜水員たち。白く書かれた“Ｚ-11”の文字もあざやか。羽布張りの尾翼操舵面も原形をとどめている。

〔左ページ上〕回収されたＦ６Ｆ-３（シリアル66237）のかつての勇姿。墜落するすこし前に撮影されたもの。

〔右段上〕着水のショックで、機首はごらんのようにゆがんでおり、プロペラもなくなっているが、ほかの部分はほぼ完全で、三色迷彩の機体表面の塗装も、もとのままであったという。

〔上左〕右主翼の機銃格納部。〔上右〕同じく左翼の機銃格納部であるが、機銃ははずされている。

〔右〕浮きドックＡＲＤ-20号上に引揚げられたＦ６Ｆ-３。胴体中央部は、まだ新しい機体のよう。

このページ3枚は、ノースアイランド基地に移されたＦ６Ｆ-3で、今年の１月２日の撮影。主脚のタイヤや尾翼の羽布張りの部分はスクラップにされたという。左主翼の12.7mm機銃もなくなっているが、これは点検のためにはずされたもの。分解整備して試射をしたところ、26年間も海中にあったにもかかわらず、以前に劣らぬ精度であったとは驚きである。

〔上・左下〕カバーがはずれてエンジンがのぞいている機首と胴体下面。胴体の下面には、着水時のきずあとが、はっきりと残っている。これは引揚げられた直後の撮影である。

〔下〕右主翼付根部分。翼面がめくれて、穴があいているが、これは引揚げ中に付けられたキズ。

〔下〕これは今年の3月10日にノースアイランド基地で撮られたF6F-3。車輪もちゃんと付けられているが、これはほかの機体のものを代用したもの。同機は現在、海軍からサンデイエゴ博物館に供与されており、同館の手で復元作業が進められている。